袖触れ合うも多生の縁

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
袖触れ合うも多生の縁

【Ｎコード】
Ｎ１４９４Ｕ

【作者名】
麦子

【あらすじ】
きみが此処で笑ってる。ただそれだけでよかった。
真面目思考の生徒と楽観的思考の先生が、おたがいにゆっくりと惹かれあっていく（はずである）春夏秋冬のお話。くっつきそうでくっつかないなかなか進展しない速度ですすんでいきます。

0．1年生の春

春なんてだいきらいだ。

４月、ぴかぴかの高校１年生、新品のセーラー服、バス通学、入学式、まだ話したこともないクラスメイト。たくさんの不安と緊張を詰め込んだことばたちがわたしのからだ中をぐるんぐるんと回りつづけて、しまいには踊りはじめてしまった真夜中の出来事。新しい朝が来ても、高速回転をつづけるわたしの出来損ないの部分はちっとも消えてくれなくて。目玉焼きを乗せたトーストといっしょにかじって飲み込んでみても、それはお腹の中で膨らんだまま未消化で終わる。家を出た頃には頭が熱くなって、お腹がきゅるるううんと変な音を出して痛くなった。はじめての高校行きのバスの中から見た流れる景色は、ぼやけたままだった。

睨んだ空の色は絵の具でベタベタ塗ったような水色がどこまでもどこまでもつづいている。満開の桜並木の坂道、ここを越えればわたしにとって新しいドアが待っているのだ。そのドアを開けるまでのドキドキがだいきらいで、踏み出す一歩をいつも躊躇ってしまう。だから、春はきらいなんだ。どうして季節は巡るんだろう、どうしてひとと出会ったり別れたりしなくてはならないんだろう、どうしてわたしは前へ進んでいかなければならないんだろう。すべてが億劫で憂鬱だ。わたしは、変わっていくことが苦手だった。

どんどんと悪化していく体調はみてみぬふり。予定していた時間を大幅に遅らせながら重たい両足を引き摺るようにして、ようやくた

どり着いた校内は静まりかえっていた。とっくに入学式は始まっている時間だった。間に合わなかった。泣きそうになりながらも、一歩一歩ゆっくりと階段をのぼっていく。あと、もう少し。

「いち、にい、さん、しい、ごおっ、ろくっ」

トントンッと軽快な足音が後ろから聞こえてきた。振り返る余裕もなく、ひたすら前だけをみる。正体不明の足音は、そのまま軽々とわたしを追い抜かして前へと出た。そうして、何段かスキップするように階段をのぼってからそのひとはぴたりと立ち止まってこちらへとからだを向けた。わたしは朦朧とする意識を、目の前に立っているひとに集中させる。

グレーのスーツがぼんやりと映った。先生にしては少し幼くみえる顔をした男の人は、しばらくじいっとわたしを上から下まで観察してから、合点がいったようにぽんと軽く手をたたいた。

「きみ、1年生？」

「はい」

「だよねえ。制服も新しいし、スリッパも汚れてない。顔もはじめて見るかんじだし、うん。どこからどうみてもきみは1年生だね。あ、ちなみにおれはここの先生ね、怪しくないから。ぜんぜん、まったく」

「はあ…」

何が可笑しいのか、へらへらと口元を緩ませている“先生”は、あれれ？と首を傾げた。わたしは、立っているのが辛くなってきて手

すりをぎゅうっと握りしめる。
下を向いていたら、いきなり影がかかった。顔をあげようとしたら、額につめたい手のひらの感触。思わず、一歩後退してしまう。

「すごい熱」
「大丈夫です」
「そう？」
「はい」
「…。この指、何本に見える？」
「に、…3本」
「残念。1本だよ」
「大丈夫ですから」
「おれには今にも死にそうに見えるんだけど？」
「大丈夫です。わたし生命線長いんで」
「うっそ、まじまじ？いいなー……ってちがうからね？ちょっと羨ましいとか思っちゃったけど、今はそういうことじゃないからね？」

この階段をあがり終えたら、体育館に着くのに。目の前に立ったまま動こうとしないこのひとのせいで、いつまでたっても前へ進むことができない。自分の体調のことよりも、今は遅れた分を取り戻すことが先なのに。なのに、どうして通してくれないの。このままじゃ、わたしだけ取り残されちゃうじゃないか。

「どいてください。わたしは入学式に出るんです」
「えっ？これから？もう式半分くらい終わってるよ？」
「それでも、出ます」
「なんで？入学式そんなに好きなの？」

「…先生は行かないんですか」
「へへ、実はちょっと遅刻しちゃってさあ」
「先生なのに」
「うん、だからいっしょに保健室行こうか。な？」

先生はさっきと同じ要領でトントンッと階段を下りてから、わたしを見上げた。こっちにおいで、と手招きされる。ゆっくりと首を振っていやだと繰り返す。先生は、少し眉をさげてへらりと笑った。

「大丈夫だって。入学式ぐらいでなくても、成績は落ちたりしないよ」

プツリ。何かが切れた音がした。滑りそうな勢いで階段を掛け降りて、へらへら顔の先生の前へ立つ。「おっ？」と声をあげた先生の、きっちりとしめられたネクタイをぐんと引っ張った。ゴツン、とおでこ同士がぶつかる。痛むおでこはくっつけたまま、すうっと息を吸い込む。

「ふ…ざけんな！わたしにとっては“ぐらい”じゃねえんだよ！出なくちゃいけないんだ！」

先生は目を見開いて、驚いた表情のまま固まった。ぐるんぐるんと体内を駆け巡っていたいろんなものが、真っ赤になって爆発したあたまからいっせいに弾き出た。

「みんなとおなじことをしなくちゃいけないの！だから入学式も、ちゃんと列の中にはいってみんなといっしょに校長のつまんない話とかよくわかんない校歌とか聞かなくちゃいけないの！」

だから、春なんてきらいなんだ。

いつもわたしに不安ばかりたくさん積み重ねて「じゃあね」と手を振って、去っていく。困惑するわたしを置き去りにして。

「“はじめ”が肝心なんだよ！朝の挨拶も入学式も新しいクラスも友達も、自己紹介も！ぜんぶ、今日を逃したらみんなといっしょにできないじゃない！」

「あ…」

「次の日なんて、全然チャンスじゃないんだから！目立ててお得、なんてこれっぽっちも思わない！ひとりだけ1日分取り残されたままクラス中の視線一気に浴びながら、うまくもなんともない自己紹介するはめになるんだから！みんなが昨日してたことをわたしだけすることになるんだからね！」

きらい、きらい、だいきらい。春が来るたびに、泣き出しそうになってしまう自分がきらい。だいきらい。

「えーと…つまりは、こわいの？」

「そうだよ！こわいんだよ！緊張してるんだよ、不安なんだよ！ばか！」

「ばか…」

あとは、ぼろぼろとこぼれ落ちていくだけだった。こんな、恥ずかしい本音なんて言うつもりなかった。初対面の、しかも入学式に堂々と遅刻してくる先生の前で大声を出して泣くつもりもなかった。なんだこれ、ばかなのはわたしじゃないか。

「うん、そっか。うんうん」

不意に聞こえてきた先生の声に、ハッと我にかえる。締め付けんばかりに握り締めていた先生のネクタイから慌てて手を離す。先生の顔を見るのがこわくなって、涙を拭うのも忘れてその場で深々と頭を下げた。どうしよう先生に向かって、とんでもなく悪いことばを吐いてしまった。入学早々、謹慎処分？それとも退学？

またぐるぐるしてきたお腹を両手で押さえるのと同時に、頭の上にやわらかいものが乗った。

「よしよし」

小さいこどもをあやすみたいに、先生がやさしくわたしの頭を撫でていた。ぽかんとするわたしを見て、先生はふわりと笑う。

「よくできました。先生がはなまるをあげましょう」

そう言って、片手で小さなまるを作ってその手をわたしの頭の上にぽんと乗せた。今度は両手で手加減なしにぐしゃぐしゃと撫でられる。からだから力が抜けていくのがわかった。
…変な先生。

「いやあ～いいなあ～高校生って！いいなあ～青いな～春だなあ～」
「……ばかにされてる」
「褒めてるんだよ？」
「ぜったい、うそだ」
「うそじゃないよ。本当に、羨ましい限りだ…若いって素晴らしいね！」
「……うぜえ」
「え？幻聴？」

この時は、まだ知らない。熱が上がってぶっ倒れて先生におんぶされて保健室へ行くことになるのも。先生がひとつ分空いていた椅子に気付いて、こっそりと入学式を抜け出してわたしを探してくれてたことも。遅刻なんて、していなかったことも。

今年も春が来た。久しぶりに見た夢の内容は、懐かしい2年前の出来事。太郎先生とはじめて話した春のこと。

明日から、わたしは高校3年生になる。

相変わらず春はだいきらいだし、お腹は痛いし熱っぽいけど、憂鬱

だなんてちっとも思わない。そう思えるようになったのはきっと、太郎先生のおかげ。ぜったい本人には言ってあげないけどね。

ねえ、春がきたよ。

明日からまたよろしくね、先生。なんちゃって。

1．3年生の春

昔のわたしに比べたら、今のわたしは随分たくましく図太くなったと思う。以前ならきっと、歩きながら堂々とカツサンドを食べる勇気なんてなかったはずだから。

桜並木の坂道をえっちらおっちら大股で歩いていく。学校に近づくにつれて不愉快な心臓の痛みが、ズキンズキンとつよくなってきた。やっぱり緊張してるんだなあ、と素直に認められるようになったのもわたしにとってはすごい進歩だ。もう太郎先生に、“青春一直線女子高生”なんて言わせないんだから。

「あ、太郎ちゃんセンセーだ」

前を歩いていた同じ高校の女の子たちがくすくすと笑い合いながら、一本の桜の木の真ん前で立ち止まっている太郎先生を指さした。せんせーい、とひとりの子が太郎先生に向かって手を振る。けれど太郎先生は、上を見上げて口をぽかりと開けたまま動こうともしなかった。

「太郎ちゃん何してんのかな」
「立ったまま寝てるんじゃない？」
「ありえるありえる。だって太郎先生だし」
「ね」

面白いから放っておこうよ、と誰かが冗談っぽく言うと女の子たちの笑い声が大きくなった。わたしは最後の一口になったカツサンドを口の中に放り込んでモグモグしながら、その一部始終をぼんやりと見守る。女の子たちが通り過ぎていったあとも、太郎先生は目を閉じてぴくりともしない。本当に立ったまま寝ているのだろうか。

「先生。太郎先生」

近づいてから、名前を呼ぶと太郎先生はすんなりと目を開けた。それから、何かをぱくんと口の中に閉じ込めてモグモグし始める。上を見上げていた視線がやっとこちらに気付いて、不思議そうに見つめてくる。だけどそのまんまるな瞳はすぐにふにゃりとゆるめられた。相変わらず口をモグモグと動かせたまま。

「先生、さっきから何食べてるんですか？」

すると先生は、べえと舌を出してみせた。覗き込んでみると、赤い舌の上にはしなしなになった一枚の桜の花びらが乗っている。太郎先生はすぐにそのピンク色をゴックンと飲み込んでしまった。ごちそうさまです、なんて律儀に両手を合わせながら。

「おはよう、吉野」
「はあ、おはようございます」
「んん、どうした？そんな不安そうな顔して」

「いえ…太郎先生は今日のごはんを買うお金もないくらい切羽詰まっているのかと思いまして」
「うはは、なんだそれー。吉野は相変わらずおもしれえーなー。よしよーし」
「いちいち撫でないでください」

楽しそうに笑いながらわたしの髪の毛をめちゃめちゃにする手はまったくゆるめない先生は、相変わらずひとの話を聞いてくれない。桜の花びらがまたひとつ、先生の髪の毛に乗った。春の陽気があたたかく揺れるみたいに、太郎先生の笑顔はいつも生温くて柔い。

「心配して損した…」
「心配してくれてたんだ。吉野はやさしいなあ〜〜」
「しみじみと感動しないで下さいウザいです」
「あれ、おっかしいな…またどこからか幻聴が…」

坂道を歩いていく生徒たちが太郎先生に気付いて元気よくあいさつしていく。太郎先生はちいさいこどもみたいにぶんぶんと両手を振って「おはよう！」と大声であいさつをかえしていく。わたしは先生の髪の毛にぴったりとくっついていた花びらをそっと摘んでみた。こんなもの食べて、お腹こわさないのかな？

「吉野も食べてみる？案外イケるよ」
「食べません、桜の花びらなんかちっともおいしそうに見えません」
「またそうやって決めつけるーよくないんだぞー」
「…桜もちは食べます」

「そうだな！おれも桜もち食べたいなあ」

そう言ってから懲りずにまた桜の花びらを食べようとする先生を慌ててとめた。太郎先生は少し不満そうな顔をして、でもすぐに表情をやわらかいものに変えた。表情筋が豊かなひとだ。

「今日は調子良さそうだな」

太郎先生が視線は桜を見上げたまま、いきなりそんなことを言ってくるものだから、今度はわたしがしかめっ面をする番だった。そんなわたしを見て太郎先生は、笑う。笑う。わらう。ちっとも悪意なんてみえない笑い方をして。きれいに、やわらかく、あったかく。

「でもちょっと熱っぽいかもな」
「先生の手、つめたいですね」
「ほら、おれって心があったかいから」
「うわあ…」
「ここ、どん引きするところじゃないから！」

ゆっくりと背を屈めて、先生がわたしをじっと見つめた。先生の瞳の中には、拗ねた表情をした捻くれ者が映っている。

「そんな顔しなくても大丈夫だって。吉野が倒れたら、またおれが

おんぶしてやるからな」

だからそうやって、また頭を撫でてこないでよ。うっかりにやけちゃいそうになるから。
やっぱりまだまだ素直になれないわたしは、素直ににやける先生の脇腹にグーパンチをお見舞いしてから急いで学校まで走った。

クラス替え発表の貼り紙を見て、担任の名前を見て、とうとう口元はだらしなくゆるみはじめてしまった。いつの間にか追いついてきた太郎先生が隣で同じように貼り紙を見上げて、嬉しそうにわたしの肩をたたいた。

「おれと吉野、同じクラスだな！」

その言い方がまるで、同級生みたいで全然“先生”っぽくなかったからわたしは我慢できずに声を出して笑ってしまった。そうだね先生、いっしょだね。うれしいよ、とっても。ぜったい言ってあげないけどね。

「1年間、よろしくな」
「ほどほどにお願いしますね」

春の陽気に浮かれまくりの先生に、こっそり教えてあげよう。商店

街にあるパン屋さんに春限定のさくらジャムが売ってること。桜の花びらよりも、もっと春の味が堪能できますよ、って。先生はきっとうれしそうに笑ってくれる。

耳元で教えた春のおいしい情報に、やっぱり先生はうれしそうに笑ってくれたからわたしもつられて笑ってしまった。

2．うっかりしてたね

今日はうっかりしてた。うっかり寝坊して、うっかりお弁当を作ってくるのを忘れてしまった。遅刻ギリギリで校門の前を通り抜けたら、校門の前に立っていた先生たちの中にいた太郎先生が「寝癖ー」と自分の髪の毛を摘んで口をぱくぱくさせていて。慌てて逆立っていた髪の毛の一部を押さえたら、先生は声を殺して笑っていた。教室について、すぐに髪の毛をお団子にセットして寝癖をごまかした。あとから遅れて教室にはいってきた太郎先生と目が合ったけど、からかわれるのがいやだったからすぐに教室の窓のほうを向いてやった。

お昼休み。一年生の時に一度行ったきりになっていた購買に向かうと、すでにたくさんの生徒でぎゅうぎゅうになっていた。あまりの熱気と人の多さに一瞬怯んだ視線の先に、真っ白なジャージの背中が映る。先頭にいる野球部の群れの間にするすると割り込んで、なにやら購買のおばちゃんと楽しげに話し込んでいる。そんな白ジャージを着た人、太郎先生は後ろに列になっている生徒たちにバシバシと肩を叩かれたりしていた。

「太郎ちゃん、割り込みは禁止だぞー」
「だって、おれお腹空いたんだもん」
「俺らだって空いてんだよ！早くどけっつの」
「太郎せんせーい、あたしデラックスチョコクリームパンが食べたいなー」

「じゃあ俺、日替わり弁当でいいわ」
「えっ、ちょ、待て待てきみたち早まるんじゃない。奢るなんて一言も先生言ってませんけど…」

生徒たちにもみくちゃにされてからかわれても、太郎先生はいつものへにゃへにゃ笑顔のまんまだ。相変わらずわたしは、お昼ご飯を買うことすらできずにぽつんと突っ立っている。ぐう、とお腹が鳴った。

「てか、太郎先生なんでジャージ着てんすか？」
「ああ、これ？聞いてくれるー？おれの不幸話」

ひとりの男子生徒にコソコソと耳打ちする姿からなんとなく目が離せない。聞きおわった瞬間、ぶはーっと男子生徒が吹き出した。「寝呆けてコーヒー溢してスーツ濡らすとか、どんだけだよー！」「ばっかやろ、そんな大声で言うんじゃありません！」…なんて太郎先生らしいエピソードだ。そういえば、よく職員室のデスクの前で首をかっくんかっくん揺らしている先生を見かける。なんであのひと先生になれたんだろう。

またグウウウとお腹が鳴いた。ちらりと購買前の人だかりを見る。今日ぐらいお昼抜きでもいいっか、と近くにある自販機に立ち寄って麦茶を購入。ここからでも聞こえる購買の賑やかなざわめきをぼんやりと聞き流して、廊下を歩きはじめる。
くん、と右腕を後ろにひかれて身体が仰け反った。

「吉野、なんで何も買わなかったんだ？」

少しだけ息を切らせた太郎先生だった。片手には膨らんだ紙袋を抱えている。むっとして、ぐるんと顔を背けると太郎先生は不思議そうに首を傾げた。朝のこと、まだ怒ってるんだから。我ながら、なんて子どもっぽい思考。

「どしたあ？ハムスターみたいに頬っぺた膨らませて」
「…指で突かないで下さい」
「だってなんかおもしろいんだもん」
「わたしは不快ですが！」
「怒った怒った。よしよし」
「撫でるな！」

ははっ、と先生は笑う。またばかにして！名前を呼ばれても知らんぷり。黙って腕を振り払ってずんずんと歩くわたしの隣をのらりくらりとついてくる先生にまたイラッとした。ついでに紙袋からただよってくるおいしそうな匂いにもイラッした。

「ついてこないでください」
「なんで？」
「……うぜえ」
「ははっ、吉野はたまに口悪くなるよなー」

尖っていた心が先生の間抜けな笑顔みたいにへにゃりと丸くなりそうになる。本当は嬉しいのに。わざわざわたしを見つけて追い掛けてきてくれたこと。でも素直になれない両足はさらに歩く速度を速めていた。

「吉野、今日はすごく不機嫌だなー」
「いつも通りです」
「そうかあ？…いやでも、朝の寝癖とか…」
「…ねっ、寝坊しただけだもん」
「……あー、なるほど」

急に立ち止まった太郎先生につられて、ついうっかりわたしも立ち止まってしまった。がさごそと紙袋の中を探ってから、「ほい」と無理矢理わたしの両手にジャムパンと焼きそばパンを乗せていく。

「お腹が空いてるから、イライラするんだ。吉野、朝ご飯は？」
「朝ご飯…も、食べてきてません」
「だろ？腹が減っては勉強はできぬ、だぞー」
「戦、じゃないんですか」
「学生の本分は勉強らしいからな。あと、これはおまけ」

ぽん、と置かれたのは一日３０個限定のプリンだった。「お金はいらないからね。おれの奢り」と笑う先生につられて、またうっかりして笑ってしまう。さっきは奢らないって言ってたくせに。

「こないだの自己紹介も、お前頑張ってたからな。ガチガチで噛みまくりだったけど」
「…太郎先生」
「あ、ごめん。怒った？今のは…」
「ありがとう…ございます」

太郎先生の真似をしておもいきり笑う。ぽかんと口を開けて、でもすぐに笑顔になる先生に声を出して笑ってしまった。
たまには、うっかりするのはいいのかもしれないなあと思ってしまう。なんて単純な思考回路なの。

「あれ、吉野髪の毛元に戻ってる」
「さっき結び直しました」
「なんで」
「だ、だって…いつもと違う髪型ってなんか恥ずかしくて…」
「そういうもんなの？」

ふーん、と先生がわたしのいつも通りのみつあみをちょんちょんと軽く引っ張る。両手がふさがっているわたしは振り払うこともできずに、じっと待機。

「先生、人の髪の毛で遊ばないでくだ、」
「朝のお団子頭、かわいかったのに」
「……」
「残念だな…ん？吉野？」
「うっ」

「あ、照れてる照れてる」
「て、てて、照れてにゃ、ないです！」
「噛んだ噛んだ。はは、やっぱり吉野おもしれーよ、うん」
「…っ、先生は白いジャージ似合ってませんけどね！」
「ひどいよ吉野！」

今度こそ本気で走りはじめたわたしの後ろで、「廊下は走っちゃだめだぞー！」と走りながら叫ぶ先生は全然説得力がなかった。わたしと太郎先生の謎のおい駆けっこは結局お昼休み終了のチャイムまで続くことになってしまったのだった。それから、不機嫌のまま教室で食べたプリンはとびきり甘くておいしくて、なんだかなあと地団駄したくなるような天気のいい４月のとある日。

3．となりのたんぽぽさん

見られている。

「じい～～～～っ」

効果音付きで見られている。隣の席の、小日向さんに。とても気になるけれど、今は授業中だ。それに彼女とは今、目を合わせてはだめな気がする。

小日向さんから集中的に視線を感じるようになったのは、確か1週間ほど前からだ。理由はまったく分からないけれど、お昼休み以外は彼女からの熱烈な視線を感じる。

「そうだな、次の問題を…小日向。この英文を日本語に訳してみろ」

「じい～～～～っ」

「小日向！聞いてるのか！」

「はい、先生！小日向なぎさは今、隣の席の吉野さんを観察することで忙しいので答えられません！」

「そうか、よし。小日向は昼休み職員室に来い」

「はい、先生！昼休みはご飯を食べることに集中したいのでいやです！」

「……もういい、座れ」

「あざっす！」

体育会系な声を出して着席した小日向さんを呆然と見つめていると、

くるりとこっちを向いた小日向さんと目が合ってしまった。静かな教室に小日向さんの声が小さく響く。

「内緒だよ」
「え？」
「わたしが早弁してるの、内緒だよ」

しいっと指を立てていたずらっぽく笑う小日向さんの口元にはケチャップがついていた。よく見ると、教科書の影に隠れている二段のお弁当。「なんか、食い物の匂いしねえ？」斜め横に座っている男子のつぶやきなんてちっとも気にしていない小日向さんは右手に鉛筆の代わりにスプーンを握りしめて、ノートをとることよりオムライスを食べることに集中している。

「わたしね、お母さんが作ってくれるオムライスだいすきなんだあ」
「そ、そうなんだ」

口いっぱいに大好物のオムライスを頬張る小日向さんの後ろで、誰かのお腹の音が聞こえた。

４時間目終了のチャイムと同時に教室がガヤガヤし始める。わたしはカバンの中からお弁当を取り出しながら、ちょっと気になって小日向さんを見ると、机に突っ伏していた小柄な背中がシャキンと起

き上がったところだった。

「お昼のじかんだ！」

ぐきゅるるると、早弁をしていたはずの小日向さんからお腹の音が鳴る。そして、彼女のカバンから飛び出た大きな三段の重箱にぎょっとする。あんな小さな身体のどこにこんな食欲が隠れるんだろう。自分のお弁当箱と見比べても、二倍以上ある。

「あっ、待って吉野嬢！」

「じょ、嬢…？」

「どこ行くの！」

「え？ご飯を食べに行こうかと…」

いつも通りにお弁当を持って教室を出ようとしたら、なぜか重箱を抱えた小日向さんがてってってっと駆け寄ってきた。小日向さん、いつも教室で食べてなかったっけ？

「どこでだれと食べるの？」

「ひとりで、屋上でいっつも食べてるけど…」

「ひとり！？そんなまさか！！」

「ほ、本当だよ？わたし、ご飯は大勢でわいわい食べるの苦手だから大抵いつも屋上で…」

「……」

信じられないというような顔をした小日向さんに、がっしりと腕を

掴まれた。小さな手なのに、ものすごい握力だ。そのまま小日向さんに引っ張られて教室をでる。前を歩く小さな女の子の足は迷うことなく屋上へとつづく階段をあがっている。

「あの、小日向さん…？」
「屋上で食べるのって、なんかピクニックみたいで楽しそう！ご飯もお日さまの味がしてうまそうだ！」
「え？」
「吉野嬢！！」
「は、はい！」
「わたし、ご飯はひとりで食べない主義なんだ」
「そ、そうだね、小日向さんっていつも違う人とご飯食べてるもんね」

羨ましいなあと思う。人見知りしてしまう自分とは正反対の女の子。天真爛漫で、ちょっと変わっているところもあるけどいつも人に囲まれている姿はキラキラしているように見えるんだ。
小日向さんが屋上の扉を開ける。あたたかい春の光が眩しくて目を細める。わたしの方へ振り返った小日向さんの笑顔は、まるで太陽みたいだった。

「だから、今日は吉野嬢と日光浴しながらご飯食べまーす！」

ピシッと右手を挙手する小日向さんがキラキラしててかわいくて可笑しくて。思わずしゃがみこんで吹き出したわたしを見て、小日向さんはにこにこしながら首を傾げていた。

「あっ、見て見て吉野嬢！たんぽぽさんが咲いてるよ！」

小日向さんが指差したわたしの足元には、コンクリートの隙間からたんぽぽが二本、凛として咲いている。ぴょんぴょんとたんぽぽの前にやってきてしゃがみこんだ小日向さんは何のためらいもなくそのたんぽぽをぶちりとちぎった。「とったどー」と叫びながら、たんぽぽを天高く握り締めている。

「なんかかわいそうなんですけど…」

「だーいじょうぶだよ！また来年になったらここにたんぽぽさん咲いてるよ多分」

「多分…」

「はい、このたんぽぽさん吉野嬢にあげる」

「いいの？」

ぎゅっと両手でたんぽぽを握らされる。にひっと小日向さんが歯を見せて笑う。そして遠慮なしに肩に腕を乗せて、ピースサイン。

「今日から吉野嬢とわたしは正式に友達だーい」

「そ、そうなの？」

「そうだよ。昨日までは友達（仮）だったけど、もういっしょにご飯食べたから（仮）はいらなくなったの、友達なの！」

「う、うーん…？」

「吉野嬢って素直じゃなくって、かわいいね！ときめくなあ！」

「は？」

５時間目。太郎先生の授業中、隣の席の小日向さんはずっと眠ってた。そのお日さま色のくせ毛には、こっそりとたんぽぽが咲いていた。さすがにわたしはたんぽぽを髪飾りにはできないから、読みかけの本のしおりに変身させてみることにする。

なんかいいことあった？と太郎先生に聞かれたけど、内緒と言っておいた。だって、なんだか恥ずかしい。帰り道にたんぽぽがちらほら咲いていて、わたしの頭の中に、おいしそうにお弁当を平らげる小日向さんが浮かんだのも、内緒だ。

3．となりのたんぽぽさん（後書き）

◎おまけ

ちなみに小日向さんの三段重の中身はこんな感じです。

一段目は母が握ってくれた三角おにぎり。具は鮭、おかか、こんぶ、梅干しとか色々。
二段目はおかず。卵焼きと焼きそばオンリー。昨日の晩ごはんの残り物。
三段目はデザート。フルーツ盛り合わせだったり、たまにドーナツとかケーキの日もあったりします。

以上。

4．花とリボン

体育館入り口前にある自販機から、情けない悲鳴が聞こえた。覗いてみると、自販機前にしゃがみこんでうなだれている太郎先生がいた。ぶつぶつと何か呟きながら真っ黒なお財布の中を見つめてため息をついている。相当ショックなことがあったのか、わたしが横に立っても全く気付いていない。先生の頭のてっぺんにかわいいチョウチョがとまった。

「５０円しかなかった…」
「お金、足りないんですか」
「うおっ」

声をかけてみたら、太郎先生は面白いくらいに肩をびくつかせて、手からお財布を落とした。チャリンと５０円玉がひとつ、わたしの足元に転がった。拾い上げた先生のお財布は、とても軽い。哀れみの視線をこめてたっぷりと太郎先生を凝視すると、先生は涙目のまま黙り込んだ。

「…給料日前日でちょっと浮かれすぎました。ごめんなさい」
「もういい大人なんですから、お金の管理ぐらいご自分できっちりやってください。親御さんが泣きますよ」
「吉野、なんか学校の先生みたいだな」
「本物の学校の先生が何やってんだって話ですよね」
「ごめんなさい」

本当にこのひと、なんで先生になれたんだろう。叱られたあとのこどもみたいにしゅんとなって体育座りをしている太郎先生がチラチラと様子を伺うようにしてわたしを見てくる。「教え子にお説教された…もう２５歳なのに…先生なのに…」と何やらメソメソとぼやく情けない声も聞こえてきた。
ちょっと可哀想になってきて、体育座りをしている先生を覗き込むようにして話し掛けてみる。

「なにが飲みたかったんですか」
「牛乳…。紙パックで、赤と白のデザインのやつ」
「１００円ですね」
「あと５０円…足りない…。これ飲まないと…力…出ない…」

こどもかよ、と突っ込みたくなることばを飲み込んで、自販機にお金をいれてボタンを押す。取り出し口から出てきた冷たい牛乳を先生の手に握らせると、まるい目をさらにまんまるくさせてわたしと牛乳を交互に見る。

「この間のお昼のお礼です。今日はわたしが奢りますよ、先生」
「吉野…お前…」
「じゃあ、わたし行きますね。購買にいる小日向さんを迎えに行かなくちゃいけないので」
「ありがとう吉野！！」
「うぎゃっ」

立ち上がろうとしたら、腕を引っ張られて思い切り抱きつかれた。
完全なるセクシャルハラスメントである。ぎゅうぎゅうと痛いくらいに抱き締めてくる両腕の力に、グエッと変な声が出た。

「ありがとうな吉野！勿体なくて、飲めねえよ！」
「飲んでください！そして離してください、暑苦しいっ」
「だって、感動したんだもん！」
「牛乳一本でですか…お手軽な感動ですね…」

先生の鼻先が、わたしの髪の毛にくっついた。耳元でもう一度囁かれたありがとうの5文字に、なぜか心臓が跳ね上がった。急いで離れようとしたけれど、力がはいらない。

「吉野の髪、なんか花のいいにおいする。シャンプー？」
「かっ、かっ、勝手に人の髪の毛のにおい嗅がないでください、変態！」
「変態…ひでえよ吉野…」
「わたしにもたれかかったまま凹まないでください！」

わたしの肩に顔を埋めてメソメソし始めた先生の身体をグイグイと押したり叩いたりして四苦八苦していると、不意に背後からカランコロン…と缶ジュースが地面に転がる音がした。おそるおそる後ろを振り返ってみると、そこにはいつもの風呂敷に包まれている三段お重箱を抱えて立っている小日向さんがいた。
しばらく見つめあってから、慌てて「違うからね！誤解だから！」と顔をブンブンと横に振りながら必死に弁解するけれど、小日向さ

んには全く聞こえていなかったらしい。瞳をキラキラと輝かせて頬を赤らませながら、青ざめるわたしに向かって、ぐっと親指を突き立てた。

「大丈夫、分かってる。小日向なぎさはいつだって恋するお嬢の味方だよ」
「こ、恋っ！？ちがっ、違うよ小日向さん！誤解！」
「なにっ！吉野、お前恋してるのか！相手は誰だっ、先生に教えなさい、いや教えてください！」
「先生は黙っててください！そしていい加減に離れてください！」
「どうしよう、ときめきすぎて今日はもうおにぎり十個しか食べられないかもしれない」
「十個も食べられたら、十分だよ！…って、待って！小日向さーん！」

キャーと小走りで駆けていく小日向さんの背中を、太郎先生を無理やり引き剥がして慌てて追う。意外と足が速い彼女はあっという間に階段を駆け上がっていってしまった。

「吉野ー」

走りながら振り向くと、体育座りをしたままの太郎先生が牛乳片手に満面の笑顔で手を振っていた。

「牛乳、ありがとうな～～！」

「〜っ、うざい！」
「ははっ」

まだ春のにおいがする昼下がり、三年間履き慣れた靴で駆け抜ける学校の中、赤い頬っぺた、不規則な心臓の音、何もかもがなんだか恥ずかしくて堪らなかった。それがなんなのか分からないまま、結んでいる髪の毛の毛先に触れてみたりする。花の香りなんて、しないよ先生。

自販機の前でうなだれていた黄色いチョウチョがとまっているその揺れる後ろ髪に、触れてみたかった。なんて、そんなこと思ってしまった自分が一番変態なのではないかと思う。

「やっと、追いついた、小日向、さん」
「吉野嬢、わたし気付いてたよ。お嬢と太郎先生のこと、前から怪しいと思ってた。わたしのこの1ヶ月のお嬢観察計画は無駄じゃなかった…！」
「そんな理由でずっとわたしのこと観察してたの！？」
「年の差、禁断、教師と女生徒…なんてときめくシチュエーション…！ありがとうお嬢！」
「だから誤解です！」

生温かい屋上にて、髪の毛に黄色いチョウチョがとまったことにも気付かないわたしは、お昼休みが終わるまで小日向さんを説得し続けた。

違うよ、とことばを繰り返すたびに胸の奥よりさらに奥の部分から感じる、針に刺されたようなちくんとした痛みが深くなっていくような気がした。

わたしはこの痛みの意味を、まだ知らない。

5．跳びたいお年頃 - 前編 -

どこかの教室の窓から紙飛行機が飛ばされていくのが見えた。そんな5月中旬のよく晴れた午後の日。

わたしたちの天敵である定期テストのあとに待ち構えているのはさらなる強敵、マラソン大会だった。知識という知識を脳ミソの中から出し切ったあと、体力まで削られていくなんて、どんな拷問だろうか。雨が降りますようにと必死に願ったにも関わらず、今日は一日快晴らしい。

照りつける太陽に舌打ちするが、あまりの眩しさに目を細めるしかなかった。

「今日は待ちに待ったマラソン大会ですぞ、お嬢！」

…ここに一部、例外の子がいた。いつになくやる気に満ちあふれている小日向さんが今は太陽より眩しくみえる。半袖に短パン、さらに前髪を真っ赤なリボンで結んでちょんまげにしている。その剥き出しになった額には“お肉”と書かれたハチマキを巻いて、元気に準備運動をしている。

「ヤル気満々だね」

「今年の一位になったら、一週間食堂でタダ食いが出来るんだよ」

「ああ…」

「あれもこれもどれもそれも食べ放題なんだよ！」

「うん、頑張ってね」

ムンッと鼻息荒くする小日向さんとは対照的に、わたしは上着にカーディガンを羽織って、生足を隠すために短パンの下に黒タイツをはいている。唯一、髪の毛だけはいつものみつあみではなくポニーテール（小日向さんの強い希望）にしてみた。小日向さんとおそろいの真っ赤なリボンがかなり恥ずかしかったりする。

「やっぱりお嬢はポニーテール似合うね！無防備なうなじがたまりませんなあ」
「…ほどこうかな」
「これでブルマだったら最高なんだけどねえ」
「前から思ってたけど、小日向さんってたまに親父くさいよね」
「誉め言葉です！」
「誉めてません」

そんなやりとりをしていたら、突然くいっとポニーテールが引っ張られる感覚がした。

「あ、ごめんな吉野。つい引っ張りたくなってさ」

いたずらっ子の正体は、真っ赤なジャージを着た太郎先生だった。謝りながらも、右手で思いきりわたしのポニーテールを掴んだまま放さない。

「吉野、ポニーテール似合うのな〜。かわいーかわいー」
「引っ張らないでください」
「だって、なんかこう無防備にゆらゆら揺れてるから掴みたくなるじゃん」
「尻尾みたいに言わないでください」
「太郎ちゃん太郎ちゃん、わたしの渾身のちょんまげはどう？」
「小日向のそれは、なんかひっこぬきたくなるな」

気の抜ける二人の会話を聞き流しながら、ふいに太郎先生の赤いジャージに目がいく。なんて暑苦しい色。この間の白いジャージの方がまだマシじゃないだろうか。そこまで考えて、「あ」と声がもれる。

「太郎ちゃん、そのジャージ若干小さいねえ。なんで？」
「これ、高校生のときに着てたジャージなんだよ。やっぱ少し小さいよなー…」
「あれ？この間着てた白いジャージは？白米みたいで美味しそうな色だったのに、勿体ない」
「白米ってお前…。いやだってさー…」

太郎先生と目が合う。口を尖らせて拗ねたような表情をしている。以前に“似合わない”といったことをまだ根に持っているらしい。先生を上から下まで見る。膝小僧の部分に穴があいている。高校生時代の先生が少し垣間見えた気がして、なんだかうれしくなった。

「…赤も微妙ですね」
「ひでえ！白もだめ、赤もだめって！じゃあおれは何色のジャージなら似合うんですか！」
「なぜ半泣きなんですか」
「太郎ちゃん、いっそのこと黄色にすればいいよ。カレーみたいで美味しそうだもん」
「小日向はそればっかだな」
「無難に黒でいいじゃないですか、もうめんどくさい」

太郎先生が好き勝手に引っ張ったり揺らしたりしたせいで、ぐしゃぐしゃになってしまったポニーテールを結びなおす。
あ。リボンの色、先生のジャージとおんなじ色だ。
なんてことを思って、すぐに恥ずかしくてなって、髪の毛を結う指先が震えた。

「もうすぐ始まるね。お嬢、今日はライバルだから！最後までいっしょに走ろうね、なんてありえないから！だって、マラソンとは己との戦いなのだから！」
「うんうん、頑張って。わたしはわたしのペースで走るから」
「よし、健闘を祈る！」

小日向さんはぴしりと敬礼をしてから、風のような速さでスタート地点の校門前まで走っていってしまう。隣に立っている太郎先生を見ると、楽しそうにへらへら笑っていた。

「小日向は面白い子だよなあ」

「はしゃぎすぎて転ばないか心配です」
「おれは吉野が転ばないか心配だけどなー。なんて」
「…」
「おっ、照れた照れた」

…ジャージの仕返しかこの野郎。腕まくりをした先生の腕がまた、わたしの頭上に伸びてくる。当然のようにくいくいと引っ張られるポニーテール。むっつりとするわたしとは反対に、先生は顔をくしゃくしゃにして笑っている。わたしの髪の毛はオモチャじゃない。

「そのジャージ、膝のところ破けてますね」
「ヤンチャなお年頃だったからな」
「今も十分ヤンチャしてるじゃないですか」
「ははっ、そうかもなー。…お。」

髪の毛に触れていた指先が真っ赤なリボンに移動していた。そっと触れて、すぐにはなれていく。

「色。おんなじだ。」

自分のジャージを指差して、いたずらっ子のように微笑む。つられて、口元が緩みそうになった。

「吉野とおそろいなら、このジャージでもいいや」

すらりと、そんなことを口にしないで先生。
恥ずかしくなる。意味もなく、すごくすごく、くすぐったくなるから。

「おお、吉野が笑ってる。いいもん見たなー、うんうん」
「わ、笑ってません」
「なんでだよー、お前はもっと笑っとけばいいの。そうやっていつも笑っとけ、な。」

くいっと軽くポニーテールを一度引っ張って、わたしの顔を覗き込んでおもいっきり笑う先生。ああ、まぶしいなあ。目を逸らすと、先生の影と自分の影が重なって触れ合っているように見えて、どこを見ればいいのか分からなくなってしまった。

やっぱり、赤も似合ってないですね。

走る前から慌ただしくなる心臓をごまかして呟いた皮肉の声は、擦れてしまった。

5．跳びたいお年頃 - 前編 -（後書き）

後編に続きます。

6．跳びたいお年頃 - 後編 -

毎年恒例の行事・マラソン大会は学校をスタート地点として、チェックポイントは商店街にある和菓子屋さん前と公園のふたつで、各チェックポイント地点に立っている先生に、腕か手のひらに桜印の判子を押してもらう。あとはひたすらゴールの学校へ戻るのみだ。

「吉野嬢、お先！」

おそろいの真っ赤なリボンは、すぐに見えなくなった。彼女にはもう“タダ食い”のことしか頭にインプットされていないんだと思う。みんなそれぞれのペースで走っていく中、わたしは最下位だけにはなりたくないという目標の元、最初っからペースを飛ばしすぎてしまったのだ。

そして今に至る。二個目の桜印を腕に押してもらった公園にて、もうすでにギブアップだと言わんばかりに両足がぷるぷる震えていた。横腹も痛いし、苦しい。日頃の運動不足が全面的に原因だろう。

「吉野、お疲れー」

顔を上げると、自転車に跨る太郎先生の姿。汗を拭いながら、再び走り出すわたしの隣をすいすいと自転車で走っていくから、憎たらしい。

「わたしたちへの嫌がらせですか」
「違う違う。おれはお前らの監視役だよ。マラソン大会って校外に出るわけだし、怠けてさぼってるやつはいないかなとかコンビニで買い食いしてるやつはいないかとか、色々」
「その目立つ赤色で監視役ですか」
「へへ、かっこいいだろ！」
「どの辺がでしょう」

得意げな表情で、先生が自転車のベルをちりんちりんと鳴らす。太郎先生と話している間に、何人もの生徒たちがビュンビュンとわたしたちを抜かしていくのがわかった。

「太郎先生、わたしもそろそろ行きますね」
「あー、ちょい待ち」

引きとめられて、振り向けば額をごしごしとジャージの袖で拭われた。太郎先生はいつも何の前触れもなくこういうことをしてくるから困る。なんというか、心臓に悪い。

「泥ついてた」
「そ、それはどうもありがとうございます」
「そんだけ一生懸命ってことだな。うんうん青春だなあ！」
「さ、最下位になりたくないだけですから」
「おう。頑張れよ～」

やる気のない声援に見送られ、わたしはまた走ることに専念する。
後ろのほうから、「太郎先生、後ろ乗せてよー」と疲れ果てた声で誰かが言っているのが聞こえてきた。
やだよー、と先生のやわらかい声がしばらく耳からはなれなかった。

＊

チャイムの音がしっかりと聞こえて、へろへろの顔を上げれば学校がようやく見えてきたようだった。この曲がり角を曲がれば見えてくる地獄の坂道を抜ければゴールの学校は目の前だ。

流れ落ちてくる汗をぐいっと拭って一度立ち止まろうとしたその時、悲劇は起こった。

右足の靴ひもがほどけていたことに気が付いていなかったわたしは、思いきり靴ひもを踏んでしまい、スローモーションのように綺麗に地面に倒れこんでしまったのだ。簡単に言えば、転んだのである。
まさか本当に転ぶとは思っていなかった。両膝に感じる痛みにただ呆然としていると、前を走っていた同じクラスメイトの二人組が慌てて駆け付けてくれた。恥ずかしくて急いで、立ち上がる。膝にずきんと痛みが走った。

「吉野さん、大丈夫！？」
「すごい音したけど…」

やさしい気遣いにうっかり泣きそうになったが、そこは持ち前の強がりで下手くそな笑顔を作って誤魔化した。先生呼んでくる？の問いかけに即座に首を横に振る。あともう少しでゴールだもん、リタイアなんてしたくない。ぎこちなく、目の前の二人に頭を下げる。

「大丈夫。あ、ありがとう」
「そう？あんま無理しちゃだめだよ」

偶然、カーディガンのポケットにはいっていたくちゃくちゃな絆創膏４つで応急措置。クラスメイトの二人は一度心配そうにわたしの方を振り返ってから、また走りだしていった。真っ赤に染まる膝の痛みに気付かないふりして、わたしもゆっくり走りだす。

「痛くない、痛くない」

まるで呪文のように自分に言い聞かせる。わたしの後ろにはもう誰も走っている生徒は見えない。もしかしたら最下位じゃないかという不安を払いのけるようにして、ただ走ることに集中する。滲んできた目元をカーディガンの袖がごしごしとこすった。
最後の難関、坂道をよたよたと歩いていく。さすがに走れそうになかった。いつも何気なく通っているこの道がこんなに険しいなんて思わなかった。学校が遥か遠くにあるような気さえする。見上げた空には、真っ直ぐにのびる飛行機雲が見えた。わたし、何やってるんだろう。…ださいなあ。

涙がぽろりと一粒落ちそうになったとき、遠くからわたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。

「見つけたー！吉野ー！」

キキーッと目の前で自転車が急停止した。赤色のジャージがキラキラと眩しくみえた。乗っていた自転車をがしゃんと乱雑に倒して、泣き出す寸前だったわたしの肩を掴む。慌ただしく視線を上下に動かしたあと、わたしの膝の怪我を発見するなり「キャアアア」と女の子のような悲鳴を上げてその場にしゃがみこんだ。

「大出血じゃねえか！」
「太郎先生、どうしてここに…」
「ついさっき安城たちからお前が転んで怪我してたって聞いて、すっとんできたんだけど…」

言葉を途切れさせて、ぎゅっと眉間に皺をつくった先生は、すぐに握り締めていた携帯電話で学校にいる保健室の先生に連絡をとりはじめた。その間、先生に握られたままの腕をじっと見つめる。太郎先生、汗だくだ。
電話を切った先生は額から流れてくる汗も気にしないで、横に倒れたままになっていた自転車を直すとそれに素早く飛び乗った。

「吉野、後ろに乗って。学校までいっしょに帰ろう。そんで、速攻保健室行くぞ」

「い、いやです。まだ走れます…ここまできてリタイアはいやです」
「…お前さあ、頑張り屋にもほどがあるよ」

怒る、というより呆れたような表情で、ふにゃりと眉をさげて先生は小さく笑った。ぐしゃぐしゃと髪の毛を掻いたあと、ゆっくりと自転車から降りて立ち止まるわたしの顔を覗き見る。

「でも、今日はここまで。いい子だから先生の言うことを聞きなさい」

弱い力で頬っぺたをつねられた。痛くないはずなのに、ぽろぽろと涙がこぼれてとまらなくなる。いや、痛いんだ。さっきまで我慢してきた膝のジリジリとした熱い痛みが一気に押し寄せてきた。小さいこどもみたいに泣きじゃくるわたしの頭を撫でる先生の手のひらは、どこまでもやさしかった。…本当に、ださいなあ。みっともないや。

「よしよし。吉野は頑張ったぞー、えらいえらい」
「で、でも、ちゃんと最後まで走れなかった、もん…」
「別にさ、怪我を我慢してまで無理に最後まで走らなくたっていいんだ。他のやつらといっしょじゃなくたって、別にいいんだよ吉野」
「でも…最下位でもいいから、ゴールしたかったよ先生」
「うん」
「…膝、痛いよ先生。本当は、もう歩けないくらい痛いの」
「うん」

太郎先生の手のひらは魔法みたいだ。わたしの強がりも弱音も涙も全部、素直に溢れださせてしまうのだから。みっともなくてもいいや、って思えてくる。

「よーし、しっかり掴まってろよー。背中に思いきり抱きつくかんじでよろしく！」

「……セクハラで訴えますよ先生」

「いやいや、違うからな！おれは、吉野がうっかり落ちたら危ないからそう言ってるだけであって、べっ、別にそういう意味じゃねえの！ちがうの！誤解なのっ！」

「なんでそんな必死なんですか」

やっと涙が落ち着いて、大人しく先生が運転する自転車の後ろに乗る。セクハラ先生のご希望どおり、思いきり先生の背中にぎゅっと腕を回してしがみついてみる。「おっ」と短い声が前から聞こえた。顔だけ振り返ってわたしを見た先生が「なんだこれ、ちょっと恥ずかしいな」と笑いながら言うものだから、こっちのほうが恥ずかしくてなってしまった。

「吉野吉野、上見ろよ。飛行機雲だ」

「はい」

「この自転車も飛んでくれねえかなあ…くっ…」

「先生、やっぱり降りましょうか？」

「だ、大丈夫だ。大人の、体力、なめんな、よっ」

坂道をじくざぐにのぼっていくわたしたちを乗せた自転車。肩で息

をしながら必死にペダルを漕ぐ先生の背中にこっそりと頬っぺたをくっつける。途端に、心臓がふわふわと浮かぶ。宙を飛び跳ねたくなるような、不思議な気持ちになった。

「そういえばさ、小日向が１１位でゴールしてたよ」
「へえ、すごい」
「当の本人は、１がひとつ多いーって、地面ゴロゴロ転がって悔しがってたけどな」
「小日向さん、そんなにタダ食いしたかったのかな…」

学校まであと少し。
あともう少しだけ、このままでいたい。恥ずかしくてどこかに跳びたくなる両足をぐっと押さえ付けて、目の前の赤色の背中にしがみつく力をつよくした。
今はただ、こうしていたいのです先生。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1494u/

袖触れ合うも多生の縁

2011年10月14日00時51分発行